神戸新聞社　令和５年12月17日（日）　朝刊

カルテ KARTE Q&A

両膝下から足の裏までしびれがあり、両足首や甲にはこわばりがあって痛みが出る。つえでは歩きにくく、歩行器を使っている。対処法を教えてもらいたい。脊柱管狭窄症の手術歴のほか、パーキンソン症などの既往症がある。（83歳、女性）

パーキンソン病

適切対処で進行にブレーキ

池本秀康医師

相談者の下肢の症状は既往の腰部脊柱管狭窄の影響が疑われます。今回は歩行困難の原因と考えられるパーキンソン病についてお答えします。

パーキンソン病は進行性の神経変性疾患で、振戦（主に手足の震え）▽動作緩慢▽関節にカクカクとした抵抗感が生じる▽バランスが悪く、転びやすくなる―などの症状が現れます。脳のドーパミン神経細胞が減少することで起こります。ドーパミンは身体をスムーズに動かすために重要な役割を果たします。

こうした運動症状に加えて、うつや認知機能障害、幻覚・妄想、睡眠障害、自律神経症状（便秘、頻尿、発汗、立ちくらみ）、感覚障害（痛み、嗅覚低下）などがあります。また、難治性の運動症状として、最初の一歩を出せない「すくみ足」、「首下がり」や「腰曲がり」などがあり、治療に難渋します。いずれも専門医の対応が必要です。

主な治療法は薬物療法とリハビリです。薬物療法ではドーパミン神経細胞の減少を補うため、ドーパミンの原料であるドパコール（一般名・レボドパ）などの薬を使用します。ドパコールはアミノ酸で、腸内で吸収される際、食事の影響を受けやすいのが特徴です。まず便秘の改善を図ることが重要です。また、ドーパミンの効果を弱めるような薬剤の相互作用にも注意が必要です。

病気の進行期には、薬が効いている時間が短くなることがあります。この場合、体が十分に動く時間帯でのリハビリを心がけることが大切です。散歩やストレッチなどを続け、体力を高めましょう。

最後に、パーキンソン病は患者さんや家族にとって大変な病気ですが、適切な治療とサポートで症状の進行を遅らせることが可能です。いつも明るい気分を保つことで、ドーパミン神経の活性化が期待されます。

（兵庫県内科医会、池本秀康＝芦屋市、池本脳神経クリニック院長）

◇第1、3、4日曜に掲載します。